

二月十五日 バターン半島上陸開始、コレヒドールに落下傘部隊降下、洞窟陣地自爆

二月二十三日 マニラ旧市内に突入

三月十日より比島諸島（ミンダナオ・セブ島）を占領開始。

三月中旬より地上戦闘焦点は、パギオからバレテ峠の山岳地帯に移る。方面軍は山岳地帯に立籠り永久抗戦、終戦に至る。

比島作戦の米軍死傷者不明者六万六百余。

比島フガ島戦について

滋賀県 船橋 利平

私は大正十二年十月十七日生まれで、昭和十八年徴集の第一補充兵役であります。昭和十九年二月一日召集令状により敦賀歩兵第一一九連隊に応召しました。

その後、敦賀、京都の連隊からそれぞれ各二個大隊ずつで独立混成第六十一旅団（旅団長・田島彦太郎少

将）が編成され、七月三十一日各地より門司に集結、混成艦第一〇二九部隊（総人員五千七百名）となり八月二日「照国丸」に乗船、夕方門司港を出航し、五島列島に二十八隻の船団が集結、八月四日、祖国を後に一路南下しました。

敵潜水艦の執拗な攻撃や悪天候に苦しめられ、船団の約半数が支那方面に転進、また二隻が撃沈されるなど、多くの犠牲を出しましたが、八月十日、「照国丸」などは台北基隆港に辿り着きました（文字通り辿り着いたという感じである）。

その後、高雄港に移り待機していたが、昭和十九年九月十日ごろ突然先発隊に出発命令が出され、八十名余りの先発隊が四隻の機帆船に分乗し、十二日夜高雄港を後に南下、バシー海峡を無事通過しバタン諸島のバタン島バスコに到着しました。この島には南方軍師団司令部が置かれていました。

兵隊は椰子の木陰に幕舎（携帯用天幕）を張り、数日を過ごす。食料は現地民の民家からニワトリ、卵を調達。衣類との物々交換です。この島にも敵艦載機二

機が毎日定期的に飛来していましたが、日本軍は全く無抵抗である。万一、銃撃した場合我が軍の被害が大きいかである。十六日夜、再び機帆船でフガ島に向かいました。

翌朝、フガ島ピラビセンターに上陸、すでに日本の工兵隊によって棧橋が作られていました。日本の椰子林の中に洋風の建物、スペイン人一族の住まいである。現地民は姿を消し、ただ野牛のみが迎えてくれました。我々はピラビセンター椰子林に仮兵舎を作りました。

十月二日、後統部隊が上陸用舟艇に分散しフガ島に上陸、第四〇七大隊七百名が守備に着きましたが、熾烈なる砲声を聞かされること度々。北部ルソン島のアバリが手に取るように見え（海上約六里）、また西方洋上にかすかにカミギン島を見ることが出来ます。フガ島の前にマバック島、バリット島（無人島）、その間がムサ島である。

フガ島は周囲二〇里程度で、島ぐるみ野牛の放牧場である。この島はスペイン人一族が支配し現地民を駆使し、原始的な捕獲で牛を捕り丸木舟に乗せフィリ

ン市場（アバリ）に送り、物々交換（主に衣類）で全島民の生活を支えている。現地民はジャングルを開墾し陸稲、野菜を栽培し、住居は立ち木を利用、屋根はヤシの葉を重ね、床は丸太を組み合わせ、草を敷き詰めた簡単なもの。上衣は身に付けない。男は半ズボン、女は腰に布を巻き、子供から老人まで素足である。

生きものとしては野牛のほかワニ、トカゲ（六尺ぐらい）、ヘビ、蜜蜂、ニワトリ（木の上に巣を作る）、ロバもいる。

島には道もなくもちろん店もない。通貨は全く必要ない。島内での交通用具はロバであり彼等は大事に飼育している。ジャングルには熱帯樹、竹や藤が茂りハブも生息していると聞く。この島には山地がなくただ中央部に百九十一メートルのナングリガン山があるだけ。平坦地の立地条件から米軍の飛行基地（本土爆撃）として反攻する可能性に備え、我々が派遣されたのです。

ピラビセンターのスペイン人の本館は玄関より入ったところが大玄関で、中央にグラントピアノ、正面に

大型の掛け時計、左側に書棚、印刷機がある。奥の部屋が食堂、右側に二階に通ずる階段があった。二階は娯楽室、寝室、子供部屋に区分され、本館裏には食糧倉庫、自家発電設備等も整い、窓はすべて色ガラス、大変立派な建物であった。この本館を大隊本部の宿舎に接収して使用していました。

本隊が上陸した数日後、敵の偵察機が飛来し始めたのである。兵の人影はもちろんのこと煙を出すことすら禁じられ、我々は陣地構築の作業に毎日追われました。

ある日の昼下がりに、三時ごろであった。「敵機発見、四時の方向より九時の方向四機進行」と歩哨からの連絡を受け「全員戦闘配置に付け」の命令。四機のうち三機はバタン諸島の方向に姿を消し、一機が島影に沿って地上すれすれの低空で頭上に飛来しました。グラーマンである。鼻頭の高い操縦者、機銃掃射により付近には銃弾、葉莖、火薬の匂い。いつしか両手の親指は銃機の押鉄を押し対空射撃（連続して銃弾発射）、敵機は何回となく旋回し攻撃してくる。爆弾投下、ス

ペイン人館に命中、凄まじい炸裂音とともに館は炎上、あたり一面は火の海と化し、逃げるに逃げようがなく生きた心地は全くなく、ハッと気付き押鉄より指を離す。どれだけの時は流れたか、銃身は真っ赤に焼け、もはや使用不能である。

これがフガ島ピラビセンター初の空襲であった。周囲の椰子林、兵舎ともに吹き飛び、焼け野原である。敵機は去り我にかえりあたりを見渡す。至る所に火は燃え煙が立ち込め、生存者の姿は一人も見当らず、ただポォーとしていた。静まった夕方近くのジャングルから一人二人と日本兵が姿を現わす。誰しも無言のままみな震えている。戦争の恐ろしさを初めて経験したためである。五十嵐分隊長も無傷で姿を出しました。

無残な日本兵の死者、頭が、片手片腕が、また肉の塊が飛び散り、その中に野牛、トカゲ、ヘビ、鶏が散乱し手のつけようがない。まず負傷者の救出に当たる。足の踏み場もない修羅場である。倒れた椰子の葉の下からウンウンとかすかなうめき声、側へ寄ってみると腹を破片でやられ、内臓が外に出ている。その側で戦

友が自分の腹巻晒を彼の腹に巻き、懸命に内臓を腹中に納めようとしている。助かるものなら助けよう、真剣なこの兵隊こそ尊い戦友愛の発露である。実に頭の下がる思いがする。この兵隊は我が三中隊の堀好太郎一等兵であり、翌夜、彼の遺体を火葬にしたのも堀一等兵であった。

この時の負傷者三名、戦死者は百七十三名、一個中隊以上の死者を出したのである。ほかに兵器、弾薬、糧秣に至るまでほとんどが消失、敵機一機の爆撃によりこれほどの被害を蒙ったことは、比島戦史上なかつたことと思う。

以後毎日朝、昼、夕方と敵の偵察機が飛来、完全に米軍に制空権を奪われたのである。糧秣の補給も望むべくもなく自給自足を強いられました。

その後、米食は全くなく、野牛肉が常食となり野菜は欠乏、ただ野生のボケの実のような果物に救われました。あるときはヘビの肉、トカゲ、パイアの木の芯までも食べたことがあります。

度重なる空襲により、島内の至る所で敵機銃にうた

れ爆弾の直撃により重傷を負うなど、日に日に死者は増えるばかりで、また熱帯性マラリア、栄養失調によって倒れる者や病人も増えてきた。

敵機は主としてグラマン、双胴のロッキードを始め艦載機、偵察機だったが、度々の空襲で地上が一変したころ、日本本土空襲の帰路B24がアボグン近くに墜落、炎上した。搭乗員十一名中三名が生き残った。これが救出のため米軍搜索隊の出動となり昼間は飛行艇による見張り、夜は信号弾による合図の取り交わし、やたらと救援物資も投下された。この中には無線機、ゴム舟艇から食料品、甘味品はもちろん、飲料水の缶詰、魚釣用具一式までも含まれていたのには驚かされた。これらの物資はほとんど我が軍の手中に帰し、思わぬ贈り物に、ルーズベルトからの陣中見舞だといって笑いながら分け合いました。

数日後、米掃海艇に乗った兵隊の一部がアボグン西海岸の砂浜に上陸中を、四中隊が奇襲攻撃した。大多数の米兵はロープ伝いに艇に戻ったが、逃げ遅れた四名を捕らえた。一か月後の終戦を知る由もなく、この

四名の捕虜を旅団命令に従い銃殺したのである。

七月三十日フガ島戦は終止符をとげるに至った。

翌々日の八月一日、第四中隊の徳照中尉以下数名で実地検証に赴いた。アボグン奥のスペイン人別荘近くで米軍飛行士をかくまっていたと思われる洞窟が確認されたのである。やはりスペイン人の日本軍に対する裏切りがうなずけられたのである。

終戦後、目前から敵の機銃掃射も止み、爆弾に代って（落下傘）ニュースB四版ぐらゐの新聞が島全土にまかれた。一面には昭和天皇の顔写真、終戦の詔勅、裏面にはポツダム宣言の内容が克明に印刷されたものであった。我々は信じられるような、信じ切れないような思いであった。

八月十五日、参謀本部からの第一報は「終戦の詔書を拜し恐縮に堪えず。バタン、パパン諸島の将兵は捕虜になりたるにあらず、神州の不滅を信じ隠忍自重せよ」と解説された。この知らせが報じられ、初めて生きてゐる喜びを感じたのである。

九月二日早朝、武器、弾薬、兵器はかすべてピラビ

センターに集積し、奉還式が行われ、兵一人一人が三八式歩兵銃を中隊長に差し出し、その横で鉄工兵がタガネで菊のご紋章をつぶした。まもなく米軍の大型上陸用舟艇が到着、弾薬、兵器類は海中に投棄した。その後、我々はルソン島のカランバン捕虜収容所に移された。

次第に体力も回復したころ、フガ島の日本兵は暮舎前に整列せよとの命令がきた。首実験である。この時、フガ島よりきたスペイン人首長と数名の現地民による顔確認が三日間続けられた。前記した米軍掃海艇の兵処刑にかかる件であった。

独立混成第六十一旅団長・田島彦太郎少将はマニラ軍事法廷（比島米軍軍事委員会法廷）において、フガ島での米兵処刑の件及びサブタン島守備隊十二名を虐殺し、その死体を海中に投棄せるゲリラを討伐関係者が虐殺し処刑せる件、以上二件で起訴され、昭和二十一年四月絞首刑に処せられた。

【解説】

執筆者の所属の、独立歩兵第六十一旅団は京都師団管区において、昭和十九年七月十日編成された部隊であり、部隊編成表は次のとおりである。

旅団長 陸軍中將 田島彦太郎（陸士第二七期）
参謀 陸軍少佐 亀本 哲

独立歩兵第四〇五大隊 長 中林清信少佐

独立歩兵第四〇六大隊 長 神保袈裟雄少佐

独立歩兵第四〇七大隊 長 田中光次少佐

独立歩兵第四〇八大隊 長 西川与三治少佐

独立歩兵第四〇九大隊 長 岡井胤吉大尉

旅団砲兵隊、旅団工兵隊、旅団通信隊、

及び昭和十九年八月二十六日、台湾軍より編入の、

独立歩兵第三〇二大隊長 酒瀬川真澄大尉

以上、六個独立歩兵大隊基幹の独立混成旅団である

（一般には五個大隊編成）。

任地については、題名にあるフィリピン、ルソン島北部、バプヤンの島である。文中にあるように、海上約六里の所に北部ルソン島が手に取るように見えるし、西方洋上にミカギン島を見、周囲には小島が点在する

という。フガ島はバプヤン諸島の中心的島嶼であり、北方にバタン諸島、更に北には台湾との間にあるバシー海峡が存在するという戦略上の要点である。

しかし、同旅団は、南方軍一第十四方面軍（フィリピン、山下奉文大將）の隷下部隊ではなく、第十方面軍（台湾）の隷下である。

第十方面軍は御存知の如く、沖縄玉砕の第三十二軍（第二十四、第六十二師団、独立混成第四十四旅団は沖縄本島で玉砕。第二十八師団、独立混成第五十九、第六十旅団は宮古島。独立混成第四十五旅団は石垣島）

他に方面軍直轄とし、第九（武）、第十二（剣）、第五十（蓬）、第六十六（敢）、第七十一（命）の各師団及び独立混成第七十五（興）、第七十六（律）、第一百（磐石）、第一百二（八幡）、第一百三（破竹）、第一百十二（雷神）の独立混成旅団及び第八飛行師団、第七給糧輸送司令部があるが、防諜名「鎧」の独立混成第六十一旅団のみが、比島の第十四方面軍に隣接し、配備されたのである。

フガ島は、連合軍艦艇及び航空機に常に襲われているが、このフガ島こそは、米軍のルソン島等のフィリピン諸島攻略、台湾、沖縄上陸にとって極めて気になる存在というよりも、足に刺さる棘、胸元に突き付けられた短刀であった。

独立混成旅団、独立歩兵大隊の戦闘能力、兵備は常設師団の第九、第十二等と比較にならぬ警備用のものである。克くぞ小部隊が優勢な連合軍海、空、陸軍部隊に対抗出来たものと、その功をたたえるべきであらう。